子供の成長

娘が小学生になり、感じたことは、我が家の長女は親の私よりも大人であるということでした。

初めての子は教育環境を整えて、人生を豊かにしてあげたいと思い文理小学校を選びました。私自身も文理中・高で六年間お世話になり、勉学と共に、心を豊かにする大切さも学ばせていただいたからです。ただ、私と妻は共に仕事をしており、お互いの職場と文理小学校は自宅から真反対の場所です。家族みんなで朝早くから準備をして、小学校へ向かい、仕事を終えてから迎えにいき（預かり教室は本当に助かっています）、帰宅してから家事をして、また次の日が始まるという毎日を過ごすことになりました。

最初の頃は車中で楽しく会話をしていましたが、徐々に会話は減っていきました。ガラッと変わった生活環境にお互い適応するのに必死でした。家でゆっくりさせてあげられる時間も短く、罪悪感からどんどん自分の心の余裕もなくなっていき、些細なことで怒ってしまうこともありました。

しばらくして、朝送っていく車内で、娘がふいに「小学校とっても楽しいよ。先生もお友達もみんな大好き。いつもありがとう。」と言ってくれました。その言葉で、すごく心が軽くなりました。娘の方が大変なはずなのに、いつも怒ってばかりの自分を気遣えるなんて、なんて大人なのだろうと思いました。いつの間にか身体だけではなく、心も成長をしてくれていて嬉しく、そして、誇らしく感じました。こちらこそいつもありがとう。ただ、欲を言えばもう少し勉強を頑張って、姉弟ゲンカは極力さけておくれ。と願っております。

「今日はどんな一日だった？」

休日に庭で草を抜くのが習慣になっています。普段、居間から何気なく眺める景色と違い、庭に降りると様々なことに気付きます。小さなクモが這っていたり、芝と思っていた植物が全く違う雑草だったり、知らぬ間にオリーブの実がなっていたり…。

先日いつものように草抜きをしている時に、ふとその逞しさに気付き、手を止めることがありました。植物は共通して、いかに多くの養分を自らへ取り込むかに特化した造りになっています。枝や葉は幹や根元を基点に斜め上に、光を求めてできるだけ重ならないよう生えています。葉は水をはじき、枝をつたって少しでも多くの雨水を根元に届けようとしています。抜いてみると、いかにその根の深く広いことか。自然選択説的に考えると当たり前なのかもしれませんが、当然のことに目を向けず、その本質に気付かないことは、そういえば日常生活ではよくあります。

「木を見て森を見ず」とは、俯瞰しないことの愚かさを表す諺ですが、一方で「木をよく見てみる」ことは意外に大切な気がしています。子供たちは宿題や塾、習い事に忙殺されがちですし、私たちも彼らにスケジュールを消化させることで手一杯です。しかし、ともすると生きづらいと言われる現在の世の中に根を張り、葉を拡げながら当然のように過ごす子供たちに、食卓で話しかけ、風呂で体を洗ってやることで気づくことはたくさんあります。毎日いろんな体験をして養分を吸った子供たちが十年先、二十年先、もっともっと先にどんな人生を歩んでいるのかに思いを馳せながら、今晩も「今日はどんな一日だった？」と声をかけます。

虫愛でる我が子を見て思うこと

虫は嫌いではないが、虫なら何でも好きなわけではない長女は、某展示会で遭遇したニジイロクワガタ、ハナカマキリ等を嬉々として見つめていた。またある日は、蝶やトンボを捕まえようとするアクティブな一面を見せた。特にアゲハチョウなどの優雅に飛翔する虫を好み、観察して絵に描いたりもする。

そんな長女の最近のお気に入りは、モモスズメという蛾である。六センチメートルを超す成虫を見つけた彼女は、初めて見る比較的大きな蛾を前に慄いていた。しかし、なるべく何事にも苦手意識を持たずに向き合って欲しいと思う私は、その大きさや体色、模様、近くに桜の木がある環境、前年に見かけた蛹の特徴から、スズメガの仲間のモモスズメであることを特定し、イメージアップ作戦を図ったのである。

幸い、この種類の蛾は幼虫から成虫まで毒を持たない。ステルス戦闘機のような三角気味の体型、顔や背中、腹回りに及ぶ豊かな体毛、蝶と異なる櫛歯状の触角、そして大きな目をじっくり観察し放題し、幸運にも娘のお気に入りと相成った。

さて、苦手なものが増えれば生きづらかろうと思った母の戦略により、娘はまんまと蛾を気に入ってくれたが、万事この調子で物事が運ぶとは限らないだろう。だが、対象を観察、調査、分析し、どう対応するかを考えることはできる。今回の対象は蛾だったが、この先の難事に直面したとき、同様に落ち着いて対処できたらいいなと思うのだ。虫を愛でる長女を見ながら、そのように未来に思いを馳せる機会を得たことを、蛾に感謝したのであった。

変わりゆくもの、変わらないもの

最近、常々思うことがある。今日も無事に一日を過ごすことができた。子どもたちの寝顔と共に明日を迎えることができる。何も変わらないことのようだが、本当はとても貴重で奇跡に近いことかもしれない……。

二〇二三年一月、私や子どもたちにとっても親しい親族の一人が息を引き取った。持病があり、思うように活動できない状態で生活されていた。ただ、子どもたちが喜びそうなことを考え、七夕飾りを作ってくれたり、花火を買ってくれて一緒に楽しんだりして過ごしたことが、ついこの間のことのようだ。私自身、医療職で人の生死を間近に感じることも多かったが、私や家族の生活に根付いた存在が蝋燭の灯のように消えゆくのを、なすすべなく見送らねばならないやりきれなさや、自分を含め残された者の行く末を案じて、頭も心も押しよせる感情で一杯となった。

いつでも会えていた人ともう会えない、子どもたちはどこまでどう感じているか分からないが、親としては毎日平穏に変わらず過ごすことが、実は当たり前ではないことに気付いて欲しい、後悔のない人生を送って欲しい、と切に願っている。と同時に、自分がいるのは自分一人の力だけではなく、身近な人は勿論、目に見えないところでの人にも支えられていることを忘れずにいて欲しい。そのためには、私もそうであるが、日々の暮らしを一つ一つ丁寧に紡ぎ、様々なことに感謝しながら、自身の土台を耕やし、築き、周りの人々を支え、丞ける（たすける）ことができると尚、ありがたい人生、豊かな人生になるように思う。

ネットで広がる世界狭まる世界

インターネットって便利ですね。私は特に調べもの、買い物に利用しています。でも、ネットを継続して利用していると、以前検索した言葉に関する広告や動画が勝手に表示されたり、興味を示さなかったトピックやニュースがおすすめ表示されなくなったりして驚きます。また、自動で表示される情報に物欲を刺激されることもしばしばです。

提供される情報に疲れた時、私は図書館や書店に行きます。昔は自分で情報を探す方法が本しか無かったからか、本に囲まれると自分のペースで選べる気がして落ち着きます。目を引く表紙の本、以前興味を持ったけれど読んでいなかった本など、自分の目からの情報や、記憶を頼りに探した本を借りたり購入したりします。何も興味を持てず、手ぶらで出ることもありますが、何となく借りた、購入した本が面白かったりすると、自分で選んだという思いがあるからか、読み終わった後もいい気分になります。

今は近くに図書館や書店があり、好きな時に利用出来ていますが、十月八日の徳島新聞に、県内八町一村、書店ゼロという記事が載っていました。急速に進む人口減少や電子書籍の普及による若者の書店離れなどで閉店しているそうです。

これからもネットで完結するようなことが、どんどん増えていくのでしょう。便利なコンテンツを利用しながら、その世界が全て、と思い込まないよう気を付けたいと思いますし、子供にも頭の片隅に覚えておいて欲しい、と思っています。

母の小言

「親父の小言と冷酒は後で効く」

…知人から聞いた諺である。

辞書によると、「親の意見は、言われたときには思い当たらないことがあっても、後から思い当たってくること。」とある。聞いた時、とても納得した記憶がある。

我が家では、「親父」より「オカン」の方が口うるさい。私である。現在九歳の息子に、いつだったか言われて衝撃だった一言がある。

「ママって何でそんなに意地悪なの？」

…ちょっと待て。意地悪、だって…？

再び辞書を繰る。意地悪とは「わざとつらくあたったり、人を困らせたりすること。」とある。未だに寝る前には息子に頬ずりをしている私が、そんな訳があるはずがない。

と、少々の反発心を抱きながら、自身の発言を思い返してみた。早く起きなさい、お布団を畳みなさい、食べるのが遅い、さっさと着替えなさい、着替えながらテレビをチラ見するな…。

…確かに…振り返ると、意図的に遊ぶ隙を与えない口うるさいオカン…だと思われても仕方ないような気もした。

最近では、漫然と急かすのではなく、やるべきことを何時から始めるのかを尋ねる形にしている。その甲斐あってか、以前よりも「しなさい」と言う回数が、少しであるが減ってきたような気がする。

いつか、随分後になるのだろうが、オカンの小言には愛があったのだ、と気づいて欲しいと思う。意地悪ではなく。

マインドフルネス子育て

本年度、徳島文理大学の松本有貴教授の「親と子をつなぐマインドフルネス子育て講座」を、小学校で受講する機会をいただきました。少人数の保護者で、ワークショップ形式で行われ、大変有意義な時間を過ごすことができました。

「マインドフルネス」とは、〝今ここ〟にただ集中している心のありようを意味します。私自身は、仕事と三人の育児に追われ、「マインドフルネス」とは対極の「自動操縦状態」での子育てが続いていました。そのため、少ししんどさを感じていたので、このような状況を改善したいという思いから、受講に至りました。

子供のあるがままをよく観察し、子供の性向を否定も肯定もせず、ただ受容することの重要性を再認識しました。常に「すること」モードの私は、子供たちを急き立て、叱咤するばかりの日々でした。ですが、「あること」モードの時間をつくることで、子供たちと心を通い合わせ、穏やかな子育てができることに気づかされました。そして、日々の子供との関わり方を深く反省しました。

受講から半年経ち、「マインドフルネス子育て」が実践できているかというと、なかなか胸を張って答えることはできません。

しかし、親が「子育て」について勉強する機会をいただけたことで、子供との関わり方を見直す良い機会となり、大変感謝しております。理想の子育てとは程遠いですが、子供の成長に少しでも親として良い関わりができるよう精進したいと思います。

タイムツリーが気付かせてくれたこと

タイムツリーの宿題を手伝ってほしいと娘から頼まれた。将来の夢について考え、その夢を叶えるためにどのようなことをすればよいのかまとめるという宿題であった。娘の将来の夢は弁護士らしい。初めて聞いて驚いた。そして、弁護士になるためにどうしたらよいか調べるうちに、大学進学、その後の研修や何度も受けなければならない試験という現実を知り、絶対に娘には無理な夢ではないのかと思った。マイペースでおっとりしている娘に、厳しい競争を勝ち抜く根性があるのかと不安になった。

ふと自分の母の言葉を思い出した。私は、現在外科医として勤務している。しかし、高校生の時、とても医学部に合格するような成績ではなかった。母は学校や塾で先生に相当厳しく言われたようだ。でも、母は誰が何と言おうと絶対に合格すると思っていたらしい。示された成績のデータのことはよくわからないけれど、絶対に落ちるわけがないと思っていたと言われたことがある。何の根拠もないのに子供のことを信じて、夜食の準備や塾の送迎をこなしてくれたことが、夢の実現を後押ししてくれたことは間違いない。

親としてできることは、子供の一番の味方として信じてあげることなのだろう。私には、まだ母のように子供を信じるという器が備わっていないのだと思う。タイムツリーという宿題のお陰で自分の未熟さに気付くことができた。娘の将来の夢はまだまだ変わるだろうが、どんな夢であろうと実現すると信じて応援してあげられるよう、親として成長していきたい。

残り一年を迎え思うこと

つい先日まで小さな女の子だった娘も、間もなく最高学年となります。我が家には八つ年上の娘もおり、こちらは昨春大学生となり、夢に向かって県外で新しい生活を始めたところです。

姉妹でこれだけ年齢が離れていると、子育てに時代の変化を感じることがよくあります。まず母子手帳の内容が違い、「日光浴しなくていいの？」「御白湯も果汁も飲ませなくていいんだ。」と驚いたことを今でも覚えています。小学校でも参観に出向けば、姉の時には児童全員が真っすぐ前を向いて静かに先生の話を聞く授業であったのが、今は発表者はもちろんのこと、意見のある子は次々と発言し、「これが最近よく耳にするアクティブラーニングか！」とその活気ある授業に八年間の時の流れを感じました。

変化しているのは子育てだけではありません。社会も目まぐるしく移り変わり、親は先の読めない未来を歩む我が子の力に少しでもなりたいと、試行錯誤の日々を送っています。

漠然とした不安を感じる中で、姉妹揃ってお世話になった先生方に親子共に見守っていただいている安心感は何事にも代えがたいと思います。また上の娘が妹を見て自身の小学生時代を懐かしんでいる姿を見ると、文理小学校の存在が心の支えとなっていることを強く感じます。

我が子がお世話になるのは残り一年間となり、早くも寂しさを感じておりますが、これからも時代の変化を取り入れながらも、変わらない「文理小学校」であり続けていてほしいと心から願います。

万華鏡

子供の頃、小さな穴を覗くと煌めきに彩られた世界が広がる万華鏡が好きだった。

精神的・肉体的に辛く苦しい不妊治療を経てやっと出逢うことが出来た長男。あの日覗いた小さな穴の先には喜びの世界が広がっていた。顕微鏡。私達夫婦は彼が卵の状態から見てきている。やがて細胞分裂し、お腹に宿り、心臓が動き始めた。それまで当たり前と思っていた『いのち』は当たり前などではなく果てしなく尊いものだと知った。つわりがひどく寝たきりだった時期でさえ、お腹の中で成長する子の誕生に想いを馳せ心は踊っていた。感動という言葉を塗り替えるような経験の出産をし、子育てが始まった。それまでの人生経験は役に立たず、ネット上に溢れる情報には振り回されるだけでその時の悩みや迷いにぴったり来るものがない。子0歳、母も0歳。育児は育自だとよく言うが、正解はわからず共に成長するものだと実感した。あっという間に首がすわり寝返りし立ち上がり喋り出す子に、自分は母として同じスピードで成長できているのだろうか。焦りばかり先行し、マルチタスクに追われる日々。『いのち』の煌めきと尊さはまた当たり前というポジションになってしまっていたかもしれない。彼が高学年になり、心も身体もまた一回り大きくなっている今。改めて、『いのち』の尊さに今度は彼と一緒に向き合いたい。彼が日々見せてくれる成長は万華鏡の世界そのもの。たくさんの友との出逢いも様々な経験も決して当たり前ではない。自分のことも周りの人も大切にできる人になれるよう、今後も共に成長したい。

卒業を迎えて

この前、入学したと思ったのにもうすぐ卒業だ。あんなに幼かった子供達は大きくなり、たくましくなった。口が達者な娘は、さらに手強くなった。思春期に突入した娘と更年期に突入しつつある母。ホルモンバランスの崩れた二人がぶつかり合い、嵐のような毎日。それでも娘は、学校での出来事を嬉しそうに話してくれる。友達と過ごす時間が楽しくてしょうがないようだ。

文理小学校では低学年から詩や和歌、古文などに触れる機会を与えていただいた。娘は百人一首にハマり、「こんなに覚えるの無理！」と言いながら、さっさと全部覚えてしまった。それが自信になったのか、古文が好きになった。「昔の人も私達と同じように四季の美しさに感動したり、恋したりしたのだな」と嬉しくなったそうだ。家族で百人一首を楽しんだのもいい思い出だ。

先生や職員の方々には本当にお世話になった。暑い日も寒い日も毎朝、校長先生が笑顔で迎えてくれた。校長先生の周りにはいつも子供達が群がっている。娘も校長先生が大好きだ。担任の先生方には細やかに愛情深くご指導いただいた。個人面談や家庭訪問では子育ての悩みを聞いてもらい、よく励ましてもらった。低学年は毎日、預かり教室にお世話になった。預かり教室で一緒だった友達は〈ソウルメイト〉らしい。

世間ではコロナ禍で行事が中止されたが、色々な工夫と配慮で修学旅行や学校行事を経験させていただいた。一味会では全学年の演奏で感動し、いつもウルウルして娘に呆れられた。

六年間、本当にありがとうございました!!

ことばのやりとりは難しい

毎年夏休みに子供たちと県内の山奥にある川に遊びに行っている。上流にある川はとてもきれいで、親戚の子供たちも一緒だ。昨年はいつもの場所からさらに上流を目指して探検に行った。すると木々の隙間から神々しいほどの光の道が降り注いでいた。とても神秘的で精霊がすんでいるのではないかと思うほどだった。もっと上流に行きたかったが砂防ダムに阻まれ断念した。これ以上聖域に入るなといわんばかりだった。このように楽しい夏を毎年過ごしていたが、何年か前にとんでもない事故に遭ってしまった。

それは家にかかってきた電話から。「○○さんやろ。○○町にあるお宅の山について話があるけん、山の入り口まで来てくれるで。」という内容だった。休みの日に約束をして山に向かった。その山は小さな吊り橋を渡って三十分くらい歩いたところにあるのだが、橋の手前で車を駐めて歩かなければならなかった。橋を渡って十分くらいたったとき、いつもの景色と違うことに気づいた。雪が積もっていたので道を間違えたようだ。早く行かなければ約束の時間に間に合わないとそのまま進んだ。すると目の前に崖が現れた。こんな崖は見たことがなかったので完全に道を間違えたことはわかったのになんとその崖を登ってしまったのだ。細長く伸びた木の根っこにつかまりながら登っていった。崖のてっぺんを目指して。この崖を登ればきっと向こうに道があると信じて。次の瞬間、突然根っこが切れてわたしは真っ逆さま。背中に激痛を感じて意識が遠のいた。「わたしはこのまま死ぬんだろうか。ここに来ることは家族に言っていない。しまった。」などなど、考えるうちになんとか立ち上がることができた。そして来た道を帰った。車に戻って電話をかけると（山の中は圏外だったので）、「○○温泉の近くで長いこと待っとるよう。」「はあ～。」○○温泉の近くにはいとこの山があった。なんでうちに電話したのかを聞くと「電話帳には○○町に○○の名字はお宅だけやったから。」いとこは電話帳に載せてなかったのだ！すぐにいとこに電話して事情を話し、わたしは無事家に帰った。何をしに行ったのだろう。

崖から落ちたことをいとこには言っていない。いつか機会があれば話そうと思っている。